

排除なき薄い包摂を目指すシティズンシップ教育の可能性

—非臨床的臨床を試みる専門的素人としての哲学者の役割—

奥田太郎（南山大学社会倫理研究所）

■シティズンシップ教育の可能性と必要性

- ◆ 市民／国民（cf. 政治的成員資格の問題、カント「歓待への権利」、アレント「権利をもつ権利」）
- ◆ 資格としてのシティズンシップ〔市民権〕／能力（資質）としてのシティズンシップ〔市民性〕
- ◆ →資格としてのシティズンシップを付与する者とは誰か？ 能力（資質）としてのシティズンシップの教育とその管轄は誰が担うべきか？
- ◆ そもそも：シティズンシップ教育は、誰によって誰のために要請されているのか？
 - 要請の文脈：既存の国民教育の補強？ 国民教育とは区別される、国籍に関わらず居留者全員が参入資格をもつシティズンシップ教育の創設？
- ◆ （国民教育とは区別されるものとしての）シティズンシップ教育の目的：市民としての役割を果たすという政治の土俵に乗りたくない人物が現われたとしても、それなりにうまくやっていける状態を維持できる社会的基盤（＝排除なき薄い包摂）の確立 【この意味でのシティズンシップ教育は必要】
 - シティズンシップ教育を拒否する権利の承認？拒否者への応答責任？

■高校「倫理」の中でのシティズンシップ教育

- ◆ 目的：すでにそれぞれが内面化させてきた社会規範とそこにこびりつく偏見を外部化させ相互に擦り合わせるその手づきを学ぶこと …一定程度の成熟を経た者（高校生くらいから？）を対象とするべき
- ◆ 批判的に思考し、相手の話を聴き、十分に思慮深く応答する知的構えの涵養
 - ◎どんな看板で？ →高校「倫理」ではなく、高校「哲学」。
 - ◎どんなスタイルで？ →対話型授業とエッセイライティング指導。
 - ◎誰が？ →正規の高校教員＋街場の哲学者
- ◆ 街場の哲学者…だと!? →立ち位置としては、担任をもたず学校全体を見ながら問題対応をする役割を担う“児童支援専任教諭”のような感じ。ただし、街場の哲学者は、児童だけでなく教員をも支援するので、「教諭」とは身分上異なる「哲学者」として校内を徘徊する。学習指導要領の他者として。
 - みなさん、まさかご自分はシティズンシップ教育修了者だとお考えですか？
 - 街場での哲学カフェその他のシティズンシップ涵養の場と架橋する役割も担う。
- ◆ 内なる外部者としての哲学者：学校に雇用されるのではなく独立した哲学者派遣機関によって雇用され、5年程度のサイクルで近隣の学校を循環。1校につき複数の哲学者が関わるのが望ましい。【来たれ出資者】
- ◆ 大学での哲学講座の役割：[共通教育として] 高校「哲学」での学びを学術的に裏づけ深化させるとともに、[専門教育として] 街場の哲学者を養成（再生産）する。

■哲学者にできることは何か

- ◆ 非臨床的臨床を試みる専門的素人としての哲学者
 - 非臨床的臨床：当事に関わる臨床を目指すと同時に、非当事者として臨床の外にあらうとする姿勢
 - 専門的素人：いかなる特定の事柄をも専門としない素人として、その素人性を自覚的に発揮する者
- ◆ →シティズンシップ教育にコミットしながらも、その営みそれ自体を常に疑問問い直し続けるスタンス
- ◆ →シティズンシップが本来抱えるべき内的緊張を保持（cf. ベンハビブ：「民主的反復」を通じた政治的成員資格の境界の流動化；「開かれたというよりも、むしろ入りやすい国境」）